

白 芙 蓉 等

田 村 西 男

黄昏の燈が、ちらりと河岸に沿ふた茶屋に點いた。雌の根高の松の梢には、蜩が鳴いて、帆を卷いた船が何艘も、行徳の方へ艤の音ゆるく歸つて行く。
流に沿ふて菖蒲屋根が一軒、蚊遣火の煙がむらく立のぼつて、まばら垣に白い芙蓉の花が、夕風に頭を垂れて、肯付くといふ露の風情。

花月に髪を卷いた、涼しい眼の婦人が、豫に腰打かけて、溢團扇をつかつてゐたが、唯耳を傾けて、人の来る氣合を聞くといふ形。

雖然別段誰も來なかつた。

『もう來さうなもんだけれどね。』

婦人は浴衣の胸を寬げて、待身が遣瀬なさう。

『其邊まで行つて、見て参りませうか。』

婆さんは悄乎した眼を連暎いてゐる。

『なに、もう來るよ……。』

日はぱつたり沈んで、病院の屋根とそれくに、月の色が、銀を流したやうに、さツと射して涼しく光つてゐる。

る。

婆さんは膝をすゝめて、

『其で御病人様は如何なので御座ります。』

『さ、』

と、斗りで、婦人はほろりとした。婆さんも敢てとは言はずに口を噤む。

『ねえお婆さん、』

力無げに婦人は、團扇をひねくり乍ら、

『何う言ふものだか旦那様は、私をお厭ひ遊ばして、何度も見舞に上つても、追ひ歸されて丁ふんで、お氣の毒だが此家を借りて、看護婦の秋月さんに来てもらつて、まあ様子を聞く次第なの。』

『お、』

と婆さんも、つい引こまれて、婦人の顔を見成り乍ら、

『其はまあ……。』

『私をお厭ひ遊ばす次第が分らないの、』

『お尊に承りますと、お姿さんが始終病院の方に居て、万事をなすつて被居るんださうで御座いますね。』

『あ、左様なのだから、私は眞箇に辛い。』

思追つて悲しくなつて、聲こそ出さないが、婦人は襦袢の袖に涙を押へた。

『時機が参りますよ、中間へ這入つて、悪さを爲る人が、あるんで御座いますね。』

『左様……。』

沈んだ調子。婦人はぐらりと下つた髪を拂つて切ない思に胸を抱いた。
月は面ともに照つて、顔のいたくも窶れたのが、歴々と見える。

『奥さんは被居りますか、安達です。』

垣の外で、苦しげな聲がした。

安達は、病院の看護婦で、此の婦人の夫に附添ふてゐるのである。

『お、安達さん、待つてゐました。お遅いから何うか爲すつたかと思つてね、』

手を取らん斗りに様に連れて來て、

『今日は甚麼工合で御座います。心配で……』

と見成る肩先。

安達の白き服は血縁に染つてゐるので有つた。

『おや、何うかなすつて、安達さん。』

『はい、鳥渡少し……』

痛さうな顔をしたが、淋しい唇を莞爾とさせて、

『案じて下さいますな、後で分る事なんですから、』

『お、』
『別にお變りはないんですが……』

『奥さん。』

と、安達は小聲に、

『お、』
『奥さんは用ありげに、外へ出て了つた。』

『貴方は眞箇に、お氣の毒で御座いますのね。』
と、打悄れて、きつと肩先を押へた。

『ゑ、』

『何にも御存知ない貴方は、私お氣の毒でなりません。』

『ふじん、あだら、ちつと贖めた。』

『婆さんは用ありげに、外へ出て了つた。』

『潮來を唄つて、舟が流を逆つて、松戸の方へ上つて行く。』

『風が颶と、葭の上をさらりと戰いで、ぱたり／＼汀に寄する彼の音。』

安達は犯すべからざる體度で、

『奥さん、貴方は御離縁をなされます。』

『ちえッ。』

持つたる團扇を取落して、婦人の腰は浮いた。而して黙りで、一語も口を開かない。たしなみの薬の香が、階

ひ呼吸に紛々と、薰り床しいのである。

『今日、貴方のお兄さんで、陸軍へ出て被居る方が御座いますね。』

『大尉で、』

『兄が……。』

『お見舞に來なさいましたので、而して貴方の御離縁の相談が纏つたんで御座いますの、』

滅^い入^るやうに叫^{さけ}んで、婦人^{ふじん}は前齒^{まへは}できつと唇^{くびる}を噛^かむでるたが、
『兄^{あい}と申^まして、彼^{かれ}は性惡^{じやく}で……、而^さして夫^おから離縁^{りえん}を申^ましましたか、其^そとも亦兄^{あい}から……。』

『旦那^{だんな}と、お兄^{あい}さんと相談^{あう}の上^うらしう御座^{ござ}んした。』

『ほんとに、』

『奥^{おく}さん、』

と、安達^{あだち}は愁然^{しゆぜん}として、

『私は今途中^{あたしいまど}、此^こ廻^{まわ}を下りて來ますと、こむもりした松^{まつ}の中^{なか}で、蹲居^{しゃが}んで密々^{こそくはなし}話をしてるる、男^{おとこ}と女の聲^{こゑ}を聞^ききました……。』

『えツ。』

『貴方^{あなた}のお兄^{あい}さん、大尉^{だいひ}の、』

『何^{なん}ですつて、』

『立^た聞き^き爲^{ため}て居たのが知^しれて、私^{わたし}とは知^しらず、帶劍^{たいけん}をすらりと抜^ぬいて、逃^にげる私の脊^せを斬^きんなすつたん^{です}』

が、木^きの根^ねへ躡^{つまづ}いて轉^{ころ}つて、私は此^この隙^{すき}に逃^にげたん^{です}が、このかすり疵^{きず}、私はまあ夢中^{むちゆう}に廻^{まわ}を下りて來たん^{です}。あの……。』

と、安達^{あだち}は脊後^{いりご}の山^{やま}を指差^{ゆびさ}した。

唯^ま松^{まつ}の風^{かぜ}に、總寧寺^{そうねいじ}の鉢^鉢が聞^きえる斗^はりで、人の來べき様子^{ようす}も更^{さら}になかつたのである。

『まあ飛^とんでもない。』



と、婦人は効はる術も知らず、唯おどくするのみで、先立つものは涙のみであつた。

『而して何を談してゐたんですの、』

『はい、奥さん、私は看護婦で、他に何事があらうとも、其を口外する責任はないのです。無論義務もないんです。例ひ貴方が身に、甚麼危難な事があらうとも、私は病者に只管看護を懇にすれば、其で職を全般するものなのです。』

私は今迄の事を貴方に言ふのさへ、私は私の職務を破つてると、言はねばならないのですが……』

と、細い眼に婦人を見て、

『餘り、餘り貴方がお可憐で、私は言ひます、おいとしいから……。奥さん、お兄さんはお鶴さんと、謀んでゐなさるです。』

『えツ。』

『やツと、五位驚が鳴いて過ぎた。』

『奥さん、緊乎なさらないと、飛んだ事になります。今更申す迄も御座いません。大概は御存知でしやうが、旦那は到底助からぬ御病症なんです、近い中には、悲しい事になりましやう。』

『…………。』

『覺悟が御肝心です。お兄さんと、お鶴さんは、情を通じて居なすつて、結局旦那が一刻も早く手は自ら下さないが、早く死ねば可いと思つてゐなさるんです。』

お鶴さんの看護の爲方は、成程私等で大層褒めて居ます。私等でも出来ない程、病人の言ひなり放題になつて親切で、周到で、能くまあ如彼も出来るものと、思はないものは一人も御座いませんが、其親切な口と美し

い指とには、大層な毒を持つてゐるんです。
ねえ奥さん、旦那がお亡くなりになれば、其相續は誰が爲るんでしやう、貴方のお腹のお子さんぢや御座いませんか。けれども其相續を横領しやうといふ、お兄さんとお鶴さんとの計略。

何程看病しても、療らない病人を親切にするのは、曰があるからです。若も旦那の御病氣が、癒るものとすれば、人から褒められる程、看病は出来もせず、又爲る氣遣ひもないでしやう。つまり彼の看病は、死に瀕してゐる病人に、お鶴でなければいけない、と、思はせる爲なんです。旦那だつて、貴方にお逢ひなさるのは、お厭ぢやないんです。時に私に、貴方の事をお尋ねなさる事があるんで、私は貴方のお心持を能くお話し申すと、肯付いて被居りますが、何しろお鶴さんが始終附添ふて、奥さんは不埒で御座います。安達は口籠つて、婦人の様子を窺つて、

『まあ、まあ……。』

婦人は繁く臉を連眩いて、俯向いた。

『殘念で御座いましやう、其で密々語といふのは、うまく離縁をさする事になつたから、一安心、是から妹の方……。』

奥さん、貴方の事なんです。

妹の方は兄の權威で、承諾をさして了ふからつて、

私は思はず總毛立つて、此所に居るのが目付かつたら、甚麼目に逢はうも知れずと、平常外科で、腕や股を切斷たりして、黒澄んだ血汐や、潮紅見たいな血を見ても、何の氣味も怖しくもありませんが、是ばかりは私真から怖氣がついて、逃出さうとすると、服の裾が木の根に絡つてゐて、拍子にビリツと破けました。

私は思はず、吁と聲を上げる。と、誰だ。破鐘のやうな聲で、お兄さんが尋ねたから、私は夢我夢中で逃げる。

ビカリ……と稻妻のやうに光つたのは、私を真二つに爲様と、劍を抜いたんでした。

所が私が、女の身でないやうな逃げやうでもあり、それにお兄さんの方では、立聞かれたといふ弱味で、気がわくついて居たと見えまして、先刻も申した木の根へ躊躇して、轉なすつた。

私は幸ひ、まあ逃伸びたんですが、突然、姫の中程に聲が發つた。

と匂切つて、安達は肩で呼吸をして、双方の手を膝について濕つて言つて。

『何でも此方へ逃げたらしい、怪しからん奴だ。』

と言ひつゝ、靴の音は段々接して、垣の外に止つた。

家なる二女は、顔を見合はせて生きたる心地もなく、密乎とする。

月明りに透すと、大尉の服を着けた大柄の男が、此家に目星を付けて、垣を越して這入らうとする所で、洋劍の先が芙蓉に觸つたので、花がほろゝと散つた。

(完)

選賞受者

第一等 五百圓

東京市芝區金杉濱町八番地里見方
(賞金拾五圓) 中村勇太郎氏

東京市下谷區西町三番地

第二等 白芙蓉

(賞金拾圓) 田村榮造氏

戦ふべきものなりや否や。

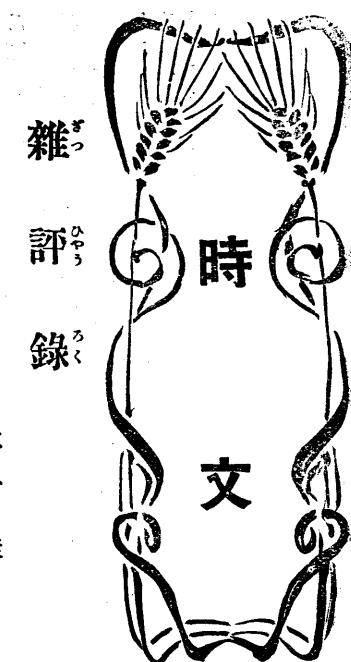
●露國の滿洲の兵を撤せざるは、獨り日本を馬鹿にしたるのみならず、支那を馬鹿にしたるのみならず、世界の列強を馬鹿にしたる也。列強舉つて、之を尤む

べし。日本のみがやつきになるは、これ列強の手さきにつかはるゝ也。氣の利いた話しに非ず。

●由來露國人は、鈍くさき癖に空威張する人種也。窮鼠猫をかみやうにて漸くナボレオンの兵を退け、や

うやつとの事にて弱き土耳其に打勝つたる事の外には露人は幾んど功名の歴史を有せず。北清戦争の際にも露の砲兵が敵をうたずして、却つて我日本兵をうつの迂闊を演出したるは、今に列強の嘲笑する所也。支那よりは、少しは強がるべけれども、到底日本の敵に非ず。もし日露相鬭は、勝利は必ず日本人の手に歸せず。露人もまんざら馬鹿にあらざれば、恐らくは、われと戰ふの愚をなさるべし。

●日露の衝突は、終に免れざるを得ざるなるべし。日清戦争に、北清戦争に、世界各國みな日本の兵の強きを認めぬ。成るべく、日本をおだて、露國と戰はしめ、己れは高見の見物をなさむとす、否、蚌蠣の争に乗じて、漁夫の利を占めむとす。今の日本は露國と



大町桂月

雜評錄

●文人が兵を談すべき筈の者でもなかるべけれど、東洋が世界萬國の爭點となり、日本もその渦中にまきこまれて、あても軍備、くれても軍備と、さわぎ立てざるを得ざる今の時勢、到底大文學、大美術を得る餘裕なかるべし。戦はむ哉。

●日露の衝突は、終に免れざるを得ざるなるべし。日清戦争に、北清戦争に、世界各國みな日本の兵の強きを認めぬ。成るべく、日本をおだて、露國と戰はしめ、己れは高見の見物をなさむとす、否、蚌蠣の争に乗じて、漁夫の利を占めむとす。今の日本は露國と

時文

雜

評

錄